京都

伊根町農委会

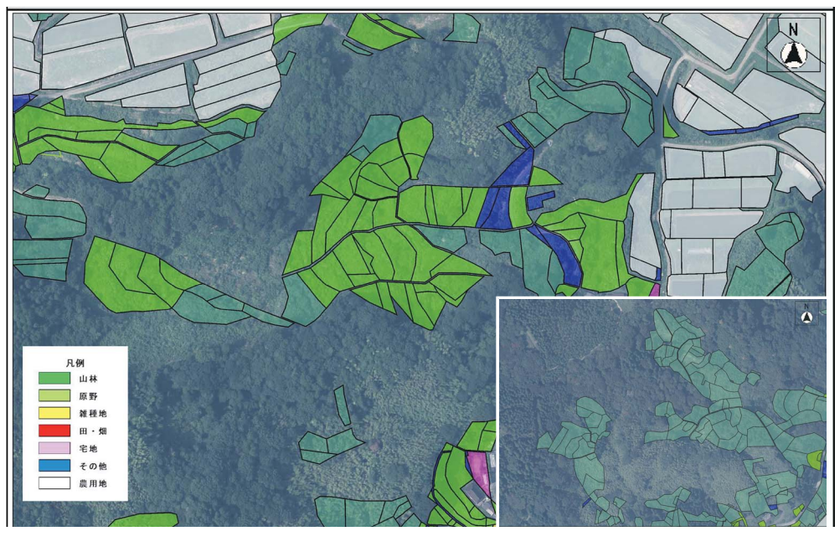
GIS地図（航空写真）を活用

2万1259筆（455ヘクタール）の非農地判断を完了

伊根町農業委員会は、京都府GIS地図システムの航空写真を活用し、約2年間かけて山間部の森林原野化した荒廃農地2万1259筆（455ヘクタール）の非農地判断を完了した。6月16日の総会で、最後の2地区（菅野・野村地区）の非農地判断を承認し、町全域の農地台帳の整理に目途がついた。

2年前の農業委員会総会で決めた「非農地判断要領」により、農業委員・農地利用最適化推進委員が地図を見ながら現地を確認し、農地として再生する可能性がなければ非農地と判断。現場に行けない山間部は目視か図面で非農地と判断し、各筆の境界が不明でも「全体が森林・原野なら非農地」と判断した。

各委員による現地調査の結果は、事務局が地区別に整理して定例総会に議案として提出し、全委員の同意を得て、非農地と最終決定した。



GIS地図を活用し、森林原野化した山間部を非農地と判断（写真右下・全体が山林ならまとめて非農地と判断）

京丹後市農委会

地区定例会と連絡調整会議を毎月開催

総勢50人で3期目スタート

農地利用の最適化推進へ

京丹後市農業委員会は、今月1日の初総会で農地利用最適化推進委員32人を委嘱し、農業委員（18人）とあわせて総勢50人の新体制で3期目がスタートした。1日に農地利用最適化をテーマに全委員研修を行い、6日以降に開催される地区定例会で代表を選出。8月定例会で地区代表を決定する。

旧町単位の活動を強化するため、地区定例会を毎月開催し、毎月の定例総会に推進委員の地区代表が出席する。総会後に推進委員代表が進行する農地情報連絡調整会議を開き、地区定例会の活動報告と今後の取り組みについての協議を行う予定だ。

京力農場プランを全地区で推進！

総会では、全委員が担当地域で「京力農場プラン」の作成・見直し」の話し合いをリードすることや、毎月10日を目標に活動することを確認した。

7月の地区定例会で、旧町ごとに前任者と委員業務の引き継ぎを行い、各地区で農業者の意向把握や地域農業の将来の在り方について検討を進める。さらに、京丹後市の施策改善の意見書を市長に提出し、「来年度の京丹後市予算に反映させたい」（梅田和男会長）としている。

摂南大学が研究・実習田を開設

水稲（280系統）を移植

八幡市農委会・長村会長が協力

田植えに参加した摂南大学農学部の学生（前列）と教員（6月18日）

摂南大学農学部が2年前に誕生し、八幡市内に校舎（枚方キャンパス8号館）が建設された縁で「八幡市と大学の交流」が深まる中で、「大学の研究・実習田」が内里地区に誕生した。6月18日に農学部の教員と学生が田植えを行い、農業生産の現場で行う研究と教育が本格的にスタートした。

「研究・実習田」では、現在、光合成の研究などを行うため水稲（ヒノヒカリなど約280系統）が栽培されている。

農業委員会の長村信幸会長が自己所有の水田を解除条件付貸借で大学側に提供。5月に利用権設定の手続きが行われ、研究・実習田の実現に協力した。

学生と農家の交流に期待

摂南大学との交流会は昨年から始まり、八幡市（市長・農業委員会会長や担い手農家など）と大学（学長や農学部の教職員）の双方が参加して意見交換を続けている。

5月9日に開かれた「『食と農』地域交流会」には、市内の担い手農家（8人）と農業委員会の役員、農学部の教員など計32人が参加し、8班に分かれて約2時間の懇談を行った。「大学のゼミ単位などで学生を交えて交流したい」などの要望が出され、今後の交流の進め方や実現に向けた課題について話し合った。

京都府支局
京都府農業会議
京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2
府庁西別館内
075・441・3660

農deきらきら

宇治市　今村正喜さん

時代の変化とともに

代々花作りをしている今村園芸13代目の今村正喜さんは、父と祖父に教えてもらいながら花農家を継いで、今年で20年目になる（写真）。

昔は、小菊・ユリ・グラジオラスなど葬儀用の仏花を中心に花作りをしていたが、最近は家族葬が多く、仏花の需要の縮小や天候不順によって生産が不安定になることから、市場流通専門の切り花バケットシステムを利用することにより、段ボール箱のロスを減らし、高品質な花を提供できるようにしている。また、SDGsを意識しながら、花の種類によってはマルチングを用いた栽培方法も取り入れて省力化を図っている。そのほか、飲食店へ花の生けこみに行くなど、地域密着の活動を、SNSを使って情報発信するなど、時代の変化に応じた改革をしている。

今後は「高品質を保持し、頼りになる花農家を目指したい」「花は心の栄養を補うもの。昨今の暗いニュースが多い中、花によって癒やされ、心の安らぎになってもらいたい」と花への想いを語っていた。

（宇治市農業委員会）

現場の想い

垣根を外すと明日が見える

▼農業委員と農地利用最適化推進委員は、集落や地域のリーダーとして、農業者の意見を市町村行政に反映させる役割を担っている。農業委員会の定例総会は、各委員が聴取した「現場の意見」を出し合い、管内の農業振興や農地利用最適化について協議する場である。▼人・農地プランの法定化により、市町村は、地域で農業の将来の在り方を協議し、「地域計画」を策定することになった。農業委員会は、農業者の意向を把握し、10年後に目指す農地利用の姿を地図化して市町村に提出する。市町村と農業委員会は、従来より連携を密にして二人三脚で取り組みを進める必要がある。▼念のため補足すると、「連携を密にする」という言葉だけでは不十分だ。市町村長部局と農業委員会事務局の垣根を越えて、農業行政の担当職員が農業委員会の総会や地区連絡会議に出席し、農業者の意見を直接聴くことで、地域計画や施策の企画立案に反映することができる。垣根を外すことで「明日の農業」が見えてくると思う。

（志）

つないで発信

女性委員が〝つないで発信〟

「京田辺」の輪を広げたい

6月26日のマルシェで野菜を販売する久御山町の上田幸子委員

京田辺の農業・福祉・観光・商工業に携わるメンバーが集まり、人と人がつながり循環していく社会を目指して、「京田辺農福観地域づくり協議会」を2年前に設立しました。

主な取り組みの一つとして、3カ月に1回、地域の生産者と消費者が出会う地域循環型マルシェ「LOVE京田辺マルシェ」をブランチ松井山手で開催しています。地元の農家が育てた野菜やお茶を販売して消費者と交流するほか、出店ブース間の交流も生まれ、ナッツのハチミツ漬け、お米とお茶の詰め合わせギフトセットなども商品化されています。

最近では地元同志社女子大学の学生も参加して、マルシェを軸にした輪が広がっています。たくさんのつながりが生まれる地域循環型マルシェを発展させ、協議会としての役割を積み重ねていきたいと思います。

（京田辺市農業委員会・山下明子委員）